令和８年度第５回合同教育研究会議議事概要

１　開催日時

令和８年９月９日　13 時 00 分～14 時 00 分

２　場所

本部棟３階　特別会議室

３　出席者

鈴木学長、高橋副学長兼教育支援本部長兼教学マネジメントセンター長、亀田副学長兼研究・地域連携本部長、鈴木副学長兼事務局長、
高嶋学生支援本部長、猪股企画・広報本部長、高橋高等教育推進センター長、
工藤看護学部長、佐藤社会福祉学部長、橋本ソフトウェア情報学部長、Tee 総合政策学部長、川﨑盛岡短期大学部生活科学科長、田中宮古短期大学部長、永富委員（学外委員：東北大学産学連携機構特任教授)、中里委員（学外委員：岩手大学人文社会学部教授）

［オブザーバー］

武蔵事務局次長兼総務室長、中川教育支援室長、柴田学生支援室長、佐藤研究・地域連携室長、千葉企画・広報室長、尾形宮古事務局長

［事務局］

高橋副参事兼総務財務課長、森主幹、田沼主任主査

４　会議の概要

議事録確認

前回会議７月８日の議事録（議事概要）については、原案のとおり承認された。

審議事項

なし

協議事項

なし

報告事項（口頭報告）

（１）　オハイオ大学、中部大学及び本庄国際奨学財団との 2026 復興防災学習プログラムの実施報告について

高橋高等教育推進センター長から、資料に基づき説明があった。委員から、本プログラムが始まった経緯について質問があり、これに対し、委員から、東日本大震災津波発災後に、オハイオ大学が本県において、被災者の方に水を配るボランティア活動を行ったことを契機としており、オハイオ大学への短期研修派遣を行うなど双方向での交流を行っている。岩手に来ていただいて現地交流していただく機会は貴重であり、現場の教員間では、本学のいわゆるグローバル人材育成といった教育とどう結び付けていくか、少しずつ考え始めている旨の説明があっ

た。これに対し、委員から、震災を契機とした活動が現在も続いていることは、これから震災の経験がない若い学生が入ってくることを踏まえると重要であり、ぜひこれからも継続してほしい旨の発言があった。

鈴木学長から、本プログラムの継続について、本庄国際奨学財団のバックアップが非常に大きく、本学学生に対する奨学金支援もいただいている旨の発言があった。これに対し、委員から、協定等の更新についても留意し、有意義なプログラムを継続してほしい旨の発言があった。

（２） 令和９年度大学入学共通テストに係る試験監督者の選出について

高橋教育支援本部長から、資料に基づき説明があり、昨年度、一年かけて大幅に運営スキームを変更し、今年度は、新たに導入したやり方を踏襲して継続していく旨の補足説明があった。

（３） 令和８年度オープンキャンパスの開催結果について（滝沢）（宮古）

猪股企画・広報本部長から、資料に基づき、滝沢キャンパス開催分について報告があり、今年度初めての取組として、オープニングでの学生歌の紹介、来場者誘導の強化、クールスポットの設置を含む空調等学内環境の整備を行った旨の補足説明があった。

田中宮古短期大学部長から、資料に基づき、宮古キャンパス開催分について報告があり、全体で３回実施するうち２回分を実施したが、いずれも悪天候であったことや、周知方法に課題があったことが影響し、参加者が昨年度に比べて減少した旨の補足説明があった。

委員から、学生歌については、オープンキャンパスに来た生徒に届け、岩手県立大学に来てよかったという思いを醸成することが大事である。また、在校生の大学への帰属意識の醸成においても大事であり、これは今後の 30 周年事業とも関わりがあると思う。学生アルバイト等についても、主体的に参加を希望する学生が殺到するくらいの機運の盛り上がりがあればよいと思う。一回限りの取組としないことが重要であるとの発言があった。

（４） 開学 30 周年事業の検討体制の整備等について

武蔵次長兼総務室長から、資料に基づき説明があり、学長のもと、事務局職員をはじめ、各本部、学部等の教職員、同窓会や後援会、学生の代表等がそれぞれの立場や役割を担い連携しながら、一体となって、記念行事を進める機運を高め、取組を進めようとするものである旨の補足説明があった。委員から、他大学では、同窓生に集まっていただく機会を、ホームカミングデーとして毎年行っている。30 年という歴史があれば、県内外で活躍している卒業生がたくさんいると思うので、母校に来て現役生と交流するといったイベントを行うことにより、双方の大学への帰属意識の醸成に繋がるのではないかという発言があった。

このことに関連し、委員から、同窓会に毎回出席して理事の方々からいろいろ話を聞いているが、現役生との接点を広げたいという希望が結構出されているので、こういう事業を通じて拡大できればいいのではないかという発言があった。

（５） 電子決裁・文書管理システムの運用開始等について

武蔵次長兼総務室長から、資料に基づき説明があった。鈴木学長から、本学の

場合、滝沢キャンパスと宮古キャンパス間の紙文書のやり取りが電子化されることで、事務処理上、プラスとなると思う。また、これまでも、事務局において各事務のＤＸ化に一生懸命に取り組んでおり、進展している旨の発言があった。

（６） 三陸アカデミー列車（モニターツアー）の開催結果について

田中宮古短期大学部長から、資料に基づき説明があり、企画検討に時間を要したとこで、周知が行き届かず、参加者が少なかったが、テレビや新聞等で報道されるなど、地域側の関心は高かった旨の補足説明があった。委員から、高校生２名の参加ということで、企画段階での目標値、及び各高校への投げ込みや案内といった周知方法について質問があった。これに対し、委員から、参加者は最大 10 名、６名の参加は期待をしており、周知については、高校訪問活動のときに、チラシを持って行ったが、その時点で、計画の途中段階であり、ここの部分の広報が弱かったのではないかと思う旨の回答があった。

委員から、文部科学省で、全国の中学校と高校の探究学習を推進しているが、取組については各学校で温度差があるようで、探究学習の一環として高校生に参加を呼び掛けるというのが、一つポイントになるのではないか。本取組は、探求の視点というか、自分で興味を持って調べたくなるような内容が満載で、単に校務、旅行商品のモニターだけではなく、探究学習と結びつけると、高校生に関心をもってもらいやすいのではないかという発言があった。

委員から、例年実施している近隣の高校との懇談会でも、探究学習との関係で、紹介していきたい旨の発言があった。

このことに関連し、鈴木学長から、本学学生の県外出身者が宮古市内に就職する例はあるが、短期大学を、単純に卒業するだけの学校と考えずに、これをきっかけとして、宮古や三陸地域を気に入ってもらい、その数をさらに増やしていけたら、いい企画になると思う旨の発言があった。

報告事項（資料報告）

（１） 令和８年度全学 FD・SD プログラム第１回高等教育セミナー開催結果について
（２） 令和８年度秋季学位記授与式実施概要
（３） 令和８年度秋季入学式実施要領
（４） 令和８年度第２回学務調整会議の開催について
（５） 2026 年いわて高校生学び応援プロジェクト『探究活動・課題研究コンクール』２次審査結果について
（６） 令和９年度大学院入学者選抜（看護学研究科、社会福祉学研究科第１次募集）出願状況について
（７） 令和８年度「キャンパス・ミーティング（学長と学生との座談会）」の実施について
（８） 令和８年度第１回学生支援委員会の開催結果について
（９） 令和８年度公開講座地区講座（滝沢市睦大学との連携講座）の開催について
(10) 第４回イノベ Café の開催結果について
(11) 令和８年度全学競争研究費の採択結果について
(12) 文部科学省「地域構想推進プラットフォーム」構築等推進事業の採択結果について
(13) 国の修学支援新制度に係る機関要件の更新確認結果について

(14)　令和８年度滝沢キャンパスネーミングライツ事業の実施について
(15)　令和８年度滝沢キャンパス防災訓練の実施について

（７）について

高嶋学生支援本部長から、９月 14 日月曜日に実施する「キャンパス・ミーティング（学長と学生との座談会)」について、今回は例年と異なり大学院生が２名参加する旨の補足説明があった。

その他

○　開学 30 周年事業の検討体制の整備等について

委員から、他大学では周年事業に関連し、寄付金をいかに集めるかについて検討されている。都内や大学キャンパスでのホームカミングデーといったイベントにおける寄付金の募集も検討されており、施設整備等も目的の一つとされている。先ほどの口頭報告で、寄付金について言及がなかったのは何か理由があるのか発言があった。これに対し、鈴木学長から、20 周年の際は多額の予算を使ったというわけではなかったが、海外からも来場し、交流している大学の学長にも話をしてもらうなど、中身はしっかりしていたという発言があった。また、国立大学と公立大学の違いがあり、公立の場合は、設置団体である県との密接な連携関係がある旨の発言があった。

このことに関連し、委員から、寄付については資料上は含まれており、今後、中身を検討していくことになる旨の発言があった。また、公立大学の場合、例えば学外実習を行う場合の受益者負担について、大学のみならず県の方針として適切か判断しなければならないなどの制約がある場合も考えられるほか、施設整備についても、国立の場合と異なり概算要求できるスキームではないという説明があった。

委員から、学生を巻き込んで、学生に「やらせる」のではなく学生が自主的に「やりたくなる」ような企画で盛り上げるといいのではないか。そうすることで、高校生などにも魅力が伝わり、さらに大学が元気になるのではないかという発言があった。

以上